北方山草（40）：37-44. March 2023

湿原・湿地への招待 2022 湿地のラン達―秋はホシクサ

雨竜町　佐々木　純一

今年も春を迎え、楽しみは湿原・湿地の花めぐりの旅程を思案すること。でも湿地の春は遅い。雪解け水は冷たく、水が緩むまで植物たちは我慢の日々で、まずは里山の花たちです。当会の観察会は北海道の南西の端っこの厚沢部からで、私の花めぐりも幕開けです。

早春の大沼、春爛漫の厚沢部と春蘭

春は道南から、厚沢部の前に大沼に寄り道が、今年の大沼の春は遅かった。沼畔には枯れヨシが優しくそよぎ、ミズバショウの仏炎苞はまだ小さな春でした。

厚沢部に集う笑顔たち、半年ぶりのご無沙汰です。観察地の美和林道はカタクリ、エゾエンゴサク、アズマイチゲ、フクジュソウと春の妖精たちが道端で、イワナシの小さく濃いピンク花が岩壁で、私たちも心ウキウキ春爛漫。次に逆川公園の雑木林を歩く。案内する藤田玲さん、稜線手前で「ありました、ツボミです」とツボミなのに弾んだ声。そうなんです、「次はシュンランです」に「咲いているとは言っていないのに」と心配顔でした。落ち葉の中に特徴的な緑葉と 3 花茎が立つ。正面でうつむく 2 花は「まだ上げそめし前髪の …」の恥ずかしげな娘さん。ならば後向きの 1 花にレンズを向ける。そこには舌を長く出した変顔のあの天才が。側花弁は開き、赤紫色の斑紋がある唇弁（リップ）をベェーと伸ばした、アインシュタインがいました（図 1）。

春の里山・安平観察会、巨匠ゆかりの植物と

落ち葉の中からユウシュンラン（祐舜蘭）が、白い小さな側ガク片を広げ、唇弁に 3 本の隆起と喉元のオレンジ色、前に突き出た距が特徴で、クリオネに似た里山の妖精です（図 2）。さらにクロビイタヤとご対面。その昔、「この木の名前は ?」と聞かれ、見知らぬカエデに焦る宮部さん、Maximowicz さんに聞くと「これは新種のカエデだ」と *Acer miyabei* と学名を付けました。宮部金吾と工藤祐舜の偉大な植物学者ゆかりの植物に出会えた 1 日でした。

初夏も道南で、誘惑と出会い

春は道南から、に続きがあります。寄り道した大沼でペンション「風」を営む朋友・金澤さんに厚沢部での観察を伝えると、返信メールに一言「これもいます」と画像が 1 枚、さらに「こんなのもあります」、とそれはコアツモリソウとイチヨウランでした。金澤さんの魔の誘惑に 5 月下旬、私はヒバの森のコロポックルになりました。

光沢のある葉が対生、葉の間から細い花茎が吊り下がり、葉に隠れて開花する。唇弁は 1cm ほどの袋状に紫筋が魅惑的な、葉隠れの術です（図 3）。唇弁が袋状になる *Cypripedium* は勝手に有袋属と呼び、花バチはこの袋に入って送受粉をするけど、とても小さな花で花バチでは無理でしょう。撮影はローアングルでも困難で、金澤さんのアイデアの手鏡の術がこれです（図